

アトリ工の隅下立てたる十五号

さやけき河に若鮎の群る

（註）の二年秋、佐伯市教育委員会、佐伯史談会主催の

「佐伯の歴史と文化と語る会」が開催され、山名麟氏、

山中道丈氏、菅一即氏其他を講師としてお招きしま

した。

山名翁は、因水由雅歩について、山中氏は、田藤上毛利家  
について、菅画伯は、佐伯出身の彫刻家について、それそれ  
淡々と述べられまし左が、ご杜使な三氏に接して、  
心撥まるものがありました。

山名翁は佐伯市の最長年者、明治四年生まれ、一百  
才です。三氏のご健在の程を切にお礼申し上げま  
す。

② 山手区の間際通りは、舗装までできあがり、よび敷歩道  
となりました。一方、長谷の菅画伯邸は、住宅が立ち  
並ぶ昔の面影がうすれつつあります。

### 中根貞考翁 略歴

東大政治学科卒業後、日本銀行入り、ロンドン在勤

二回。国庫局長から大坂支店長となり理事兼任。

本店帰任後、当時の三十四銀行、山口銀行、鴻池銀  
行の三行合併して、現在の三和銀行を創立する也、迎  
えられて初代の頭取に就任、在任十二年。

昭和二十年十一月引退。その後、持株会社整理委員

会委員長の内命を受け、準備中昭和二十一年三月貴族  
院議員に勅選。秋集「庸微」のため追放となり辞職。

昭和二十六年解除。

著書に「帰路」「ふるさとの旅」「白桦隊」「庸微

」など、戦後には「矢野龍溪」「伊藤」「故郷難忘」

「帰去来」などがあります。

昭和三十九年歿。

### 探訪記

#### 津久見・白桦・野津探訪記

会長 高木 吉田 雅 輝

一月二十四日、本会の研修の一環として探訪の探訪を  
行つた。午前八時大手前集合、一行十九名を乗せて  
マイクワバスは上浦に向つた。

佐伯・津井のコースはこれまで何回か通つた道である  
が、左手の山景色、右手の海景を、いつ見ても別分ぬ眺  
みである。

ゆがいて津井峠に分かる。ここから津久見を経て白桦ま  
での海岸道路は、初めての人もおつたと思ふが、木知の  
人には是非すすめたいコースである。

峠を上るときの下界の眺め、峠を越してからの右方に  
展開する海を眺めれば、正に絶景である。

此越り冬風の海見之かくれ 長良子

津井峠、日代峠、津久見峠は雪がなごりカルカラに  
湛えて心を染まさせる。私は通りすぎる沿道の眺めに旅  
の楽しみを見出す。それは初めて、峠をよむが、再遊三  
遊は更に可である。

津久見では大友宗麟の墓に詣でる。淋しかつた宗麟の  
晩年を偲ばせるたたずまいである。耳川の氣に吹かれて勢  
威はこぼれ、神仏を迫襲して人心を矢い、酒色に溺れて  
正妻から白桦城を追われた宗麟の憤怒たる姿が、古らり  
と眼前を横切るのであつた。

津久見峠を越えた所で、白桦から逆村に来たれた高橋  
長平忠堂、迎藤正義両氏と出会う。首難いことである。

趣味を同じくする者同志の温い気持が、地域を起えて日  
のほのを通う疑いまである。以後両氏の懇切な御案内が  
白坪を離れる迄続く。

先ず新築新装の成つた白坪圖書館を見学する。館長高  
橋先生の心血を注いだ経営は至れり尽くせりの施設と利  
用状況によく現れている。そうして外面も貧弱な位相のそ  
れと比較して、羨望にたえないものであるが、白坪藩政  
時代の膨大を資料がよく整備され、更に研究の手が加え  
られていくことに感銘を深くした。

次に下山古墳に向かう。私にとつてはここは曾遊の地  
であるが、それから大分年を経たので殆んど新たに見る  
感下であつた。古墳時代(四世紀)に造られた巨大な前方  
後円墳である。堅穴式の石棺は千数百年の歲月に耐えて  
訪れる人と待つものの様である。男根を象徴した柱石も  
印象深いものであつた。

大いなる石棺の上の散り松葉 長良子

それから深田の石仏へ。何度か訪れたこの里であるが、  
何度見ても深遠で玄妙な仏の姿や顔は見おきない。

冬ぬくー鼻かけ給ふ仁王像 長良子  
膝までと没す仁王に冬日落し

よいものは何度見てもよい。見る度に俗心と洗われて  
仏心が磨かれるすがすがしき感すると共に、平安の昔  
に此の大事業をバックアップした人々、更に岩壁に鑿を  
奮つた人々、仏縁にすがつた精進の姿が偲ばれた。

冬ぬくー石仏我と羊眼に 長良子

霜解又ち 童顔秋迎の石仏  
石仏に千古の夢や冬うらら

御案内の御接待に多大の御配慮をいただいた高橋近藤  
両氏に全員感謝の別れを告げて車を野津に進める。

ここでも野津探検会の方々が出迎えて、親切に案内し  
て下さつた。全く感謝に堪えない。  
磨崖窟クルス氏傾きかけた午後目の目ざしを受けて、キリ  
スト教徒後難の歴史を語つていた。

杉落葉磨崖窟クルスの岩一つ 長良子

列明公大友義鑑の墓は野津院川のほとりの列明寺跡に  
淋しく立つていた。義鑑の没後に当地にいた側室が、墓  
根を平つて此の墓と建てたとか伝承と案内の方々から承  
つた。重後大守の墓として区いささか貧弱な此の古墳す  
まいは、伝承の真実性と物語つている。銘銘の十九代が  
寺指氣にかかると、義鑑は大友二十代の日すであるが、大  
友歴代中誰か(九代氏継?)を指して数えたのであろう。

キリシタン記念館では板についた館長平山氏の説明に、  
全員の多量の感銘をうけた。

柳中登次ニ孝女の記念碑は、川登小学校の清浄な境内  
建つていた。案内の川野堂比古氏の説明をきいて、健  
なニ孝女への追慕の情を新にした。

孝女の碑 芝枯れ伏しし枝展に 長良子

最後に風蓮鐘乳洞へ。私は随分前に一度入洞したこと  
があるのだが、全く印象のちがうのに驚いた。忘却の波  
は日々記憶を洗い去つてみんな結果に落ちるゆゑである。  
史蹟・名勝、旧蹟等出来れば再遊三遊と繰返して見学する  
ことが必要であることとを痛感した。

鐘乳洞の見学を終えた時は、短い冬の日が西山に傾い  
て、静心を催す頃になつた。野津の方々に深甚な謝意を  
表して車上の人となつた。

冬日落つ風鐘乳洞ぬくし

長良子

爾及てよい一日であつた。よい天気は恵まれたこととも探訪を楽しいものにした。郷土史の基礎である地理の把握を提唱しているが、その一端も達せられた。いつものことながら、同じ車に乗る合わせて一日行を共にした。老人の、深いながら結ばれた友誼も大きな収穫であつた。ペンと欄干に當つて、再び津久見峠の展望がよみがえつて来る。

(前記) 当日御案内や御接待下さつた方々

- 白村史談会会長、圖書館長 高橋長一先生
- 全 前会長 金田剛平先生、本会顧問 津本不三子氏
- 本会賛助会員 近藤正義氏、長田同夫氏
- 野津探史会会長 安藤三馬氏、会員 戸川 大氏、土居真
- 藤氏、後藤 政氏、平山長英氏、川野真比古氏
- 当方同行会員 五十川千代見、羽柴 弘、多田太郎吉
- 甲斐利江 市野源仁、吉良梅夫、吉田雅雄
- 山徳清一、山後夫、下川史人、若杉吉雄
- 高矢勘蔵、五十川金作、清田義雄、小野盛雄
- 若田善市、高木嘉吉、平川 繁、神田繁雄

報告

昭和四十六年度評議員会

去る一月十六日(土曜)佐吉御殿で新年度の役員会を開いた。

1. 先ず高水会長より、前年度の反省に立ち、今年度の抱負希望をもちつする挨拶があり
2. 羽柴幹事から、会務、会計の報告、平山氏監査報告があり、別項の通り決算と承認した
3. 次に本年度の事業計画と協議、概ね前年度の事業を踏襲するも、特に力を入れるものとして、今年度他三研修会を治港にする、研修旅行として、国東の仏教文化再訪、四国宇和島一犬洲一松山とめぐり、別府石垣原、高崎山登山等を実施、文化講演会、資料展等を主催する。
4. 本年度予算案審議、別項の通り決定
5. 会費は前年通り八〇〇円、一〇〇〇円

会則は別に修正はない、被褥誌「佐伯史談」は毎月十日を発行日とする、役員改選 二年経つて改選期に当り、会長副

会長再任、評議員その他三名の異動があつた。

報告(四)の通り決定、

久、其他行事、研修等についての打合せ、總談等(午後四時半折会)

昭和四十五年分 佐伯史談総目次について

今回も河野会員によつて一年分の総目次が出来ました。一年分の綴りの初めに付けて下さい。

「佐伯史談」は会員の研究発表の集録で、それ以外の才も、郷土の歴史、文化、民俗等々資料集です。昭和四十年から毎年一冊宛、それ以前は「郷土史研究」と共に七冊目になります。

主張も随想、研究や珍らしい資料記録等に分類し、題目、筆者名をかなが掲載号数とページとつけてあるので索引に便利です。

一年分(第六十号)第一号(二号)をそれぞれ、総目次とせて製本されることをおすめします。私の手許で「御年」通り、材料費(実費少々)を限って複製本を奉仕します。(但し二月末までで打ち切り) (羽)

研修の記録

一月から二月にかけて

一月三日(日曜) 新年初歩、檜山に登る。ヤチノ日近郊の最高峰、快晴です。さうい展望、十名参加

一月十五日(金曜) 佐伯史談第七十二号印刷完了、発行

一月十六日(土曜) 新年度役員会を佐吉御殿で

一月二十日(土曜) 古市引地の愛宕神社の境内を踏査、佐伯氏居館跡と推定する。会員十名参加

一月二十四日(日曜) マイフラスパスにより津久見一白崎一野津の地を現地研修会、会費十九名出席

一月三十一日(日曜) 直川地区集会、高水羽柴、参加、地元六名有意義であつた。

二月六日(土曜) 訪問史談会、佐伯市東五の首田義雄氏方で、十四名出席し、い勉強が出来た。